

福岡県指定有形文化財

ぶ ぜう じ えん ぎ
武蔵寺縁起

第四幅

縁起とは、社寺の起こりや沿革、
 靈驗れいげんなどの言い伝え、あるいはこれ
 を書き記したものをいいます。奈良
 時代後期から寺院の増加につれて縁
 起もふえ、平安時代後期からは絵巻
 物化されていきました。これが縁起
 絵図とよばれるものです。室町時代
 以降、社寺の経済的な基盤が失われ
 はじめると、民衆から寄進を求める
 宣伝手段として縁起や縁起絵図は重
 要な役割を果たすようになっていき
 ました。

全5幅からなる武蔵寺縁起絵図は、
 江戸時代中期（18世紀）に描かれた
 とされています。

また、江戸時代中期以前じょうおうに定應
 という武蔵寺の僧侶によって書かれ
 た「椿花山武蔵寺薬師如来縁起」が
 明治期の写本としてあり、縁起絵図
 とともに武蔵寺伝説を伝えるものと
 して貴重です。

- ①天武方（右）と大友方の戦い。
- ②大友方の勇将智尊ちそんのため天武方が敗北する。
 （『日本書紀』や武蔵寺縁起では記述が異なる）
- ③近江瀬田橋の戦い。右为天武方、左が大友方。
- ④天武方の鋤鉤きりこ（鉏鉤）、瀬田橋のほとりで
 智尊を斬る。（このことは『日本書紀』には見えない）

※紙本著色 画面 61.1cm×139.0cm

椿花山武蔵寺縁起 (写)

▼縁起 (写) の一部

以下は武蔵寺縁起絵図第4幅にあたる箇所を抄訳したものです。

八倒さる状々恰も天柱も摧け
 地維も裂るるの怪まきる劍
 戟互ひよ塵辰ふも雖も大友
 遂も敗軍し及びは斯る処り
 大友の大將智尊を趕々たる
 武まよて此勝を見て悚肯と
 大太刀提け躍り出獅子奮
 迅の怒りを為志楯と鎧した
 まりに坊り頂をま唯一虎の群
 羊よ当るの如く汗馬縦横よ
 僻易志黒烟塵空よ響き馳
 遠へ揉合せて懸破ヨを寄手
 の軍卒少き色いきまて視て
 智尊孫勝よ兼て威執り猛よ
 見たりと音鉄十誦の音の村
 頃刻変化の應兵も戦屈きてそ
 見えたりける尤れも御方数萬の

天智天皇が亡くなられた翌年の壬申の大乱で、虎麿は天武天皇に従い、対立する大友皇子の軍勢と戦った。その際、虎麿は金襴の笠印と錦の大幟、馬印を建てて美しい衣服を天に輝かせ、村国男依・大伴吹負らとともに、大友軍が陣取る近江へと向かった。男依・鉤・息長たちは大友の軍将たちを数多く討ち取り、大友皇子は自ら群臣を率いて橋の西に陣を敷いた。互いに鐘や鼓を打ち鳴らし数万の兵や軍馬が叫びわめく様は打寄せる大波に似て、まるで山が崩れ海水が沸きあがるようである。両軍とも武器をふるい力の限り戦ったが、ついに大友軍は敗れた。しかし、大友軍の大將である智尊はさすがに勇敢な武人であった。この敗戦にこらえきれず一人で大太刀をかざし、獅子が暴れるような勢いで天武軍に向かっていった。さすがの天武軍も少々動揺しはじめたのを見て、智尊はいよいよ勢いに乗って猛々しくなり、形勢は一瞬逆転するかに見えたほどである。しかし、味方は勇猛な数万の虎のような兵士たちであり、とりわけ虎麿の作戦が不思議な力をもって天武軍の兵たちを勇気づけた。双方の兵は再び旗をひるがえし戦った。矢が飛びかう様は、まるで雨が降るかのようである。天武軍は一途に死を決して戦ったので、智尊をはじめ大友軍はひとり残らず戦死し、大友皇子は行くあてもなく自害された。このような危険な状況のなかでも虎麿は無事に、しかも抜群の戦

果をあげた。虎麿の頭上にはいつも紫雲がたなびき、その上には十二神将が現れて夜昼となく虎麿を守ったのである。天武天皇の時代はたいへん不思議なできごとが多く、虎麿はこの天皇に仕かえていることから、妖怪に出会うこともたびたびであったろうが、災害が身にふりかかることはなかった。

- 註. (1) 天武天皇はこの時点ではまだ即位しておらず、大海人皇子とすべきであるが、武蔵寺縁起(以下、縁起と略)原文のままとした。
- (2) 『古事記』の序には天武天皇の功績をのべて「絳旗耀兵」とあり、赤い旗を用いたらしい。
- (3) 『日本書紀』(以下「書紀」と略)天武元年7月2日条には近江方と区別するために赤色を衣の上に着けたとある。
- (4) 美濃国各務郡(岐阜県)の豪族で、近江方面の戦いで主将として活躍した。天武5年(676)7月没。壬申の功績によって外小紫位を追贈された。
- (5) 「書紀」によると、吹負は天武元年6月29日に大和方面の戦いの將軍に任命され、7月4日、近江方の將軍大野君果安と乃桑山での戦いのすえ、敗走したことになっている。
- (6) 小子部連鉤のこと。天武元年6月27日、2万人の兵を率いて天武のもとへ参じた。8月25日、山にかくれて自害。
- (7) 縁起では人名として記されているが、地名の誤り。「書紀」には村国連男依らが息長の横河で近江軍と戦い、破ったことがみえる。滋賀県坂田郡米原町醒井付近に比定される。
- (8) 近江方の将。「書紀」天武元年7月13日条の他には見えない。